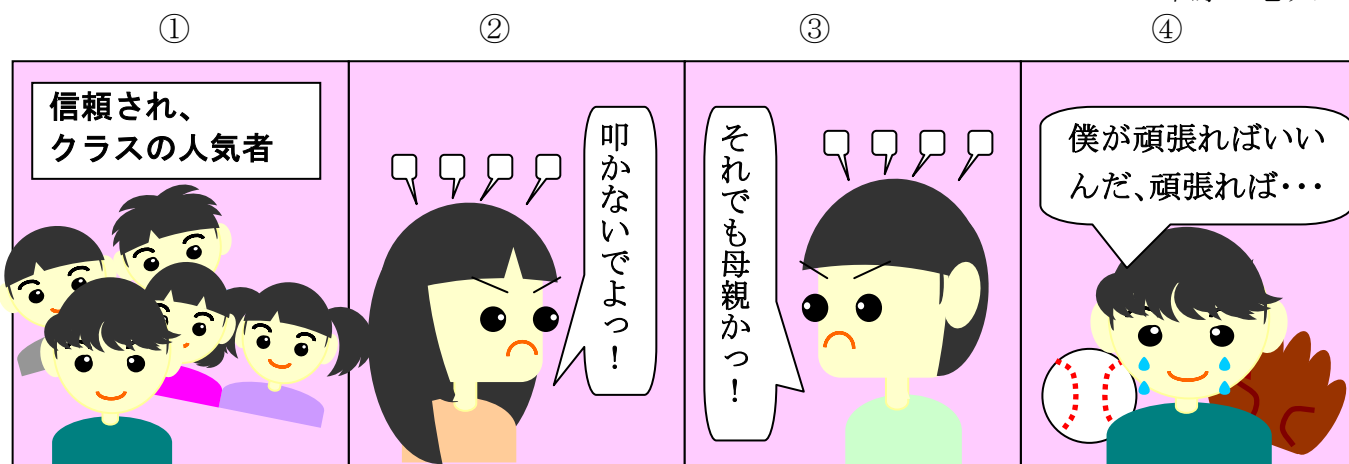


5. 事例4: 父の暴力から母を守るために良い子を演じていた ～表面的な問題の裏にも、いくつかの問題が～

特定非営利活動法人 Future School *燦*
中原 恵人



<概要>

0君（中学1年生から不登校、現在高校2年生）

小学校時から運動も勉強も良くでき、いわゆる「しっかりした生徒」としてまわりに認識されていた。先生からも信頼され、友人も普通にいて、いじめられることも、いじめることもなく順調な学校生活だった。しかし、中学1年生3学期から急に不登校に。当初、きっかけは野球部での試合でミスをして、先発メンバーから外されたことがあげられていた。その後、家ではしばしば暴力が出て、部屋の壁などがバットで穴だらけに。

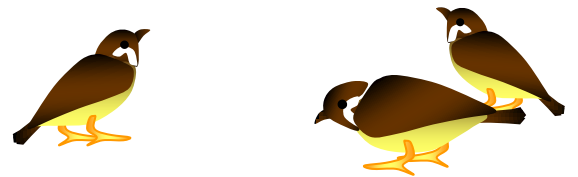
不登校の状態が1年近くになるころ、家族だけでの対応に限界を感じた母親から依頼があり、まずは親御さん面談を。当初は上記のような内容の話を母親はしていたが、面談を重ね、いろいろと話を聞いてゆくと、また違った側面が現れた。もともと父親と母親の関係が上手くいっておらず、父親は時に母親に暴力をふるうこともあった。その父親に脅かされるように、勉強も頑張り、スポーツも必死にやらざるをえなかった。父親の言うことを聞かなかったり、結果が出せないと、父親の機嫌の悪さが母親へと向かうので、それを止めるためにも頑張っていたとのことだ。

ここで焦点が父親へと移ったが、父親との面談で、また違った一面が見えてきた。それは、母親の主婦業のいい加減さだった。食事もコンビニ弁当などであり、洗濯物など含めた家庭状況はかなり劣悪なものだった。しかし、その背後には姑との確執があり、これらの母親業失格と思える状況も一概に母親だけのせいではないと言えることがわかった。こうした、本人以外の家族にも様々な問題があり、それが長年積み重なり、本人の「不登校・ひきこもり問題」として突如、表出する場合もある。その後、両親との面談を地道に続け、家族間にある様々な問題に対処しながら、並行して本人との接触もはかった。しかしその過程も長い道のりであり、家庭訪問を始めてもまったく会ってくれなかった。それでも根気よく訪問を続

け、約1年後、やっと本人に会えることが出来た。

まずは訪問スタッフとの信頼関係を構築することを目標に、家庭訪問を続け、トラウマになっているであろう「野球」を逆にキーワードとして（なぜならこの場合のトラウマは本当の意味ではなく、ひとつのキッカケ、物語としてのトラウマである故に）、キャッチボールなどをした。そうして信頼関係を構築し、「野球」への情熱を取り戻させ、その「野球」をやるために人数が必要ということで、徐々に「会うスタッフ」の数を増やしてゆき、他の生徒ともコミュニケーションを取るよう進めた。

その後、「自信」を取り戻し、「仲間」「愛情・友情」を実感できるようになった本人は、すべてにおいて「やる気」を取り戻し、通信制の高校に通いながら、大学進学を考えている。また家族関係も、すべて修復とまではいかないが、それぞれの努力のもと、また本人の成長とともに、少しずつ改善されつつある。



＜こんな対応が良かった＞

☆「不登校・ひきこもり問題」のすべてが本人に原因があるとは限らない。

一面だけを見ての対応は危険であり、家族全体を見渡しながらか、本人への対応を考えることが大事である。

☆「不登校・ひきこもり問題」は家族全体で向かい合わなければ解決できない。

本人への対応のみではなく、家族それぞれがこれまでの行動、また今後の本人へのサポートを考えてゆかなければならない。

☆「不登校・ひきこもり問題」のキッカケが、本当の原因ではない。

時には敢えてそのキッカケを使用し、過去の清算、未来へのステップとすることも有効である。

☆家庭訪問で最初から本人に会えることはまずない。

数年かけて訪問することで、やっと部屋の扉も、心の扉も開いてくる。家族と支援者が共に、あきらめず、あせらず、じっくり、ゆっくりという気持ちを持って、未来を信じて家庭訪問を続けてゆくことが大事である。

☆会えるようになったとはいえ、いきなり大勢の人間にかかわることは、本人にとっても非常に大きなストレスとなる。「社会復帰」に向けての家族の期待の大きさは理解できるが、関わる人間の数を徐々に増やすなど、本人のペースに合わせた環境整備が重要である。

☆「未来は必ず見えてくる」。この言葉を信じて、全ての問題を肯定的に受け止め、家族だけで解決しようと無理をせず、積極的に周りの人間に相談し、専門機関のサポートを受けるべきである。